[地域総研紀要　15巻1号, P 23－28（2017）（一般論文）]

保育・児童福祉分野実習における学生の学びに関する一考察*
―韓国の生態幼児教育の視察をとおして―

宮地　あゆみ**

A Study of Practicum Students at the Childcare and Child Welfare Institution
－Through the Visit at the Early Childhood Ecological Education in South Korea－

Ayumi MIYADI**

キーワード
生態幼児教育、保育実習、児童福祉実習

はじめに

2016年度大学事業計画にある、「社会福祉学科の高度化のための方向性を確かなものにするために、福祉ニーズの多様化・高度化に対応した教育プログラムを充実し、福祉教育の『総合商社』化を図る」とした重点課題に対して、本学社会福祉学科における学生の児童分野での知識や技術の取得の指針を探るため、韓国の保育現場にて生態幼児教育の実態を視察してきた。韓国では近年、釜山大学を中心に生態幼児教育のプログラム研究が行われており、一部の保育現場では実際に実施されている。今回は、生態幼児教育のプログラムを取り入れている保育現場を視察し、その実態について学んできたことから、本学の社会福祉学科における児童分野での課題について考察していきたい。

社会福祉学科の課題

社会福祉学科では、社会福祉士および精神保健福祉士の資格が取得でき、卒業後は、医療分野、高齢者分野、障害者分野、児童分野、精神保健福祉分野などに、社会福祉の専門職として就職している。現在、社会福祉学科では、社会福祉コース、精神保健福祉コース、医療福祉コースが設けられており、学生は関心のある分野についての知識や技術を、それぞれのコースにおいて習得できるようになっている。

このように、各コース別に専門の知識や技術を蓄積することができる体制になってはいるが、児童分野に関しては社会福祉関連科目内の社会福祉Ⅱモジュールにある、児童福祉論（1年次後期開講）でしか、子どもに関連する学びの機会が設けられていない。だが、本学社会福祉学科においては、児童分野に関心を示している学生は決して少なくない。2016年度の社会福祉実習指導Ⅰにおける実習先希望調査では、27人の実習を希望する学生のうち、児童関連部分へは第3希望までを含めると、16人の学生が希望している。そうした現状があるなか、学生が児童福祉論以外で子どもに関する知識や技術および関わり方の方法を身につけるためには、コミュニティサービスラーニングで、子どもに関連があるプログラムを受講する以外には特に設けられてない。しかも、本学のコミュニティサービスラーニングは、希望したプログラムを確実に受講できるシステムにはなってはいない。そのため、児童分野に関心がある学生は、自分達で関連があるボランティアに行く以外、子どもと触れ合う機会がないのが実情である。

このような実状があるなか、2016年度に児童分野に実習に行った学生の感想のなかには、「はじめて、子どもと触れ合った」、「最初は、どう遊んだらいいかわからなかった」、「子どもと信頼関係を構築するのは難しかった」、「子どもとの面接は生活場面面接で、日常生活の全てが面接になり、子どもとの信頼関係が築けないと色々と話してもらえないから、信頼関係の構築がとても重要だったが、遊びを通して信頼関係を構築することはとても難しく、最初の頃は子どもと遊べなくて苦労した」などの意見が聞かれた。

また、実習指導者の方からも学生に対して、「学生が、子どもと関われていない」、「信頼関係が構築できていない」、「一人一人に合わせた関わりをするように心がけて欲しい」「子どもの発達に応じた、レクリエーションを企画し、実施して欲しい」、などの指導や意見をいただいている。

* Received December 1、2016
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

このような状況があるなかで、大学側も児童分野への関心がある学生に対して、子どもに関する知識や技術および関わり方などを、少しでも習得する機会を設けられるようにしていく必要がある。そのため今回は、子どもと触れ合い信頼関係を構築するためには、『関わり方のスキルとして、どのような知識や技術を習得しておくことが必要なのか』、『どのようなことを意識したうえで、遊びを展開させていくことが求められるのか』などを探るために、韓国の生態幼児教育のプログラムを取り入れている保育現場を視察してきた。そして、視察をとおして窺えてきたことを踏まえ、社会福祉学科における今後の取り組みの方向性について考察していければと考えている。

視察期間と視察園

- ８月16日　10：00～13：00
  公立チョンガ保育所　ベイ・オンジン施設長

- ８月17日　10：00～13：00
  金井村の自然学校　ドンウォン科学技術大学校幼児教育科ハ・ジョンヨン教授

- 10月７日　15：00～16：30
  マリナ幼稚園　リ・ハジョン先生
  （案内：経商大学校社会福祉学科バク・ソチュン教授）

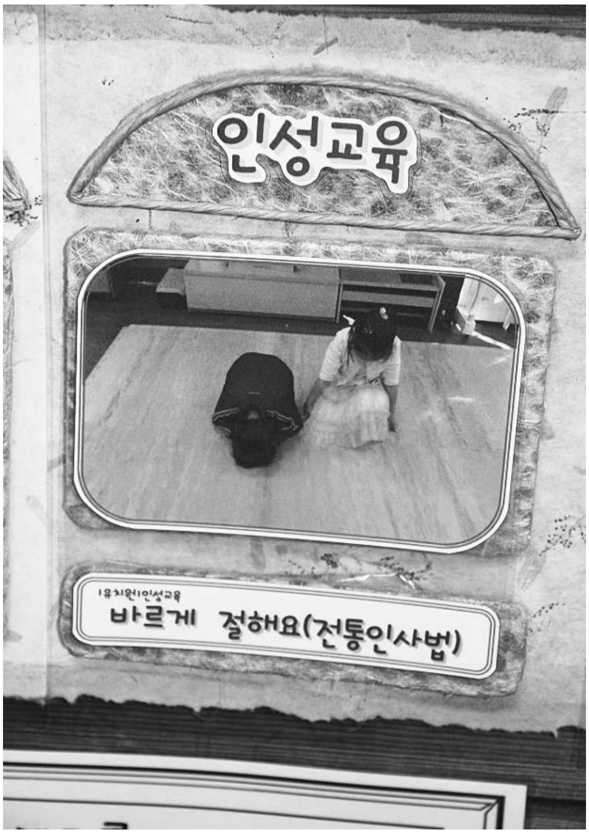
韓国の幼児教育課程と現状

韓国の幼児教育は、韓国幼児教育界を指導してきた梨花女子大学と、中央大学の幼児教育科が中心になり進められてきたようである。

林は、韓国の幼児教育の動向について「韓国の近代幼児教育は朝鮮時代末に日本人が設立した幼稚園とその後のアメリカ人宣教師たちが設立した幼稚園から始まり、日帝36年を経て、1945年光復後は米国の強い影響を受けながら今日に至っています。したがって、韓国の現代幼児教育は、形式的・制度的には日本の影響を受けて幼稚園と保育所の幼保二元化体制を保持しつつ、内容的・方法的な側面では米国の影響を受けて米国式の幼児教育を実践しているということができます。すなわち、今日の韓国幼児教育の実体は、制度は日本製で、内容は米国製、子どもは国産ということになるでしょう。韓国の現代幼児教育の歴史は、梨花女子大学と中央大学の幼児教育科が主導的な役割を果たしながら、①施設や機関中心の幼児教育、②幼稚園中心の幼児教育、③教育中心の幼児教育、④幼児教育専攻者中心の幼児教育、⑤西洋式中心の幼児教育、という流れの中に位置づけられるのであり、それは、親･家庭の育児機能と施設･機関の幼児教育の間の不調和、幼稚園と保育施設の葛藤、幼児教育と保育の葛藤、幼児教育の専攻者と非専攻者との葛藤および韓国式の幼児教育と西洋式幼児教育の葛藤の歴史を生み出すことになりました。」（林2008：51）と述べている。

近年韓国の幼児教育は、2013年から幼保統合化のなかでヌリ課程が導入され、保育園と幼稚園に通う満３歳から５歳までの全ての幼児が、均等な質の高い一貫した教育を受けることが出来るシステムになっている。しかも補助金の関係から、保育園や幼稚園は定期的な審査を受けるシステムになっており、認可を受けた保育園や幼稚園では必ずヌリ課程に沿った幼児教育が展開されているかの確認もされているとのことだった。

※ヌリ課程ではコーナー遊びを推進しており、上の写真は各教室に設けられたごっこ遊び用のコーナーである。
（撮影場所：マリナ幼稚園）



※ヌリ課程のプログラムにより、週の学ぶべきことが写真にして各教室に貼られていた。上の写真は、訪問した時の週の写真である。この週は、韓国の伝統的な挨拶についての写真が貼られていた。
（撮影場所：マリナ幼稚園）

生態幼児教育

今回は、生態幼児教育プログラムの運営と実践をおこなっている、ドンウォン科学技術大学校幼児教育科ハ・ジョンヨン教授の金井村の自然学校（無認可園）。元ハ・ジョンヨン教授と一緒に、釜山大学の保育園で生態幼児教育プログラムにて保育をおこなっていた、ベイ・オンジン施設長の公立チョンガ保育所。釜山大学で生態幼児教育の研究をおこなっている、リ・ハジョン先生のマリナ幼稚園を視察してきた。

この３つの園のうち、公立チョンガ保育所とマリナ幼稚園は、韓国の幼児教育プログラムであるヌリ課程に沿った保育が展開されていた。とくに公立チョンガ保育所では、生態幼児教育のプログラムがかなり取り入れられているなかで保育が展開されていた。ハ・ジョンヨン教授の金井村の自然学校は、韓国の幼児教育プログラムであるヌリ課程ではなく、生態幼児教育のプログラムにより保育が展開されていた。（補助金は受けていない）

今回、視察してきた生態幼児教育について、事前に関連する論文を国立情報学研究所のCiNii Articlesで検索してみると、林の論文のみ検出された。

林は、生態幼児教育について「生態幼児教育は21世紀の生命危機時代に直面して、産業文明の最大被害者である幼い子ども達の病んだ体と心と魂を生かし、ひいては成長と開発、資本と競争の論理が支配する既存の幼児教育現実を改善しようとする新しいパラダイムの幼児教育です。それは韓国人の５千年の生の知恵に土台を置いた自生的韓国幼児教育であり、自然の順理に土台を置いた普遍的な幼児教育ということができます。また、生態幼児教育は産業化・都会化によって、自然と遊びと子どもらしさを忘れてしまったまま室内に閉じこめられ、『鶏場の鶏』のように育てられている子ども達に自然と遊びと子どもらしさを取り戻させて『地鶏』のように育てようとする新しい幼児教育―自然親和的幼児教育―でもあります。

生態幼児教育では生命中心幼児教育、共同体中心幼児教育および身・心の魂の幼児教育を基本理念とし、さらに『幼児教育の地域化・民族化』を志向しています。韓民族の固有思想である三神思想、弘益人間思想、風流思想、民族宗教思想はもちろん儒教・仏教・道教の東洋思想、西洋の基督教の生命思想、生態生命思想、新科学思想などに土台を置いて、子どもの教育を考えようとしています。要するに、生態幼児教育は、生命論的な世界観に基づいた幼児教育として、産業社会の子ども達に自然と遊びと子どもらしさを取り戻させ、理性と感性と霊性の調和のある教育、身と心と魂を大切にする教育を通じて子どもが幸せに暮らすことのできる世の中を作りだそうとするものです」（林2008：54）と論じていた。

ハ・ジョンヨン教授による生態幼児教育の講話

ハ・ジョンヨン教授から、生態幼児教育について直接講話を頂くこともできた。「近年では、韓国政府が『幼児教育においては、遊びを中心にするように』という方針を掲げている。しかし、園長先生達の世代が『勉強は早期からさせるべき』という考えを持っており、保育園や幼稚園での子ども達の活動が、遊び中心にはなっていない現状がある。また、親も『早期に勉強をさせなければ、良い大学に入れないし、良い仕事に就けない』という考え方を持っている。その他にも、歴

史的な儒教の影響もある。このような背景があるなかで、韓国の保育現場では幼児期から勉強をさせる保育をしている」と教えてくださった。

※上の写真と左下の写真は、金井村の自然学校の園庭の様子である。子どもたちが外で遊ぶため、外に子ども用のタオル置き場や、工作場などが設けられていた。
（撮影場所：金井村の自然学校）

※右上の写真は、海を見ながら、海に関連した絵本を見ている様子。
※右下の写真は、お散歩で近くの海にいき、保育者と海の観察をしている様子。
（撮影場所：公立チョンガ保育所近くの海岸）

「生態幼児教育は、1995年から自然教育（もしくは、生命教育）としてスタートした。そして、2000年からは韓国の乳幼児プログラムのなかに、モンテッソーリやレッジョ・エミリアなどと同じように、生態幼児教育が含まれるようになった。私たちはそのことにより、生態幼児教育が乳幼児プログラムにおける地位を獲得したとみている。

それまでの韓国の保育は、欧米のプログラムにより保育が展開されていた。しかし、韓国には5000年の歴史がある。その歴史のなかには、育児や子育てについての知識や経験および技術などが含まれており、必ずそのなかには、韓国独自の哲学や方法があるはずという思いから、調査研究がスタートした学問である。だが生態幼児教育は、日本の倉橋惣三の影響も受けている。韓国の哲学からスタートしているが、必ず毎年、日本の自然のなかで保育をしている、保育園や幼稚園を視察しに行っている。韓国の保育の哲学を追及していくと、日本の自然を取り入れた保育と重なってきた。生態幼児教育は、東学（韓国を指す。すべてのものを尊重する。）、仏教、その他の宗教が母体になっている。それらを体系化したのが、生態幼児教育である。

生態幼児教育は生命が中心で、自然についてや命について教育をしている。そして、生活中心の教育でもある。子ども達にとっては、地域が遊び場で学校である。そのため、地域住民や地域の自然と触れ合うことも大切にしている。遊びをとおして、子ども達が様々な経験をし、自分で考えて行動することが出来るような感性を身につけられる保育を展開していく必要がある。子どもの好奇心を引き延ばすことは、その後の子どもの人生における探究心にも繋がっていく」などと、ハ・ジョンヨン教授は話してくださった。

一応のくくりとして

今回視察させて頂いた、公立チョンガ保育所やマリナ幼稚園では、国が指定しているヌリ課程に沿った保育が展開されていた。しかし、ヌリ課程に沿った保育をおこないながらも、子どもたちの遊びや探究心を引き延ばすことを意識した保育が展開されていた。

今回の視察を通して３つの保育現場では、生態幼児教育のプログラムを意識し取り入れるなかで、受験戦争のイメージが強い韓国であるが、幼児期には勉強ではなく遊びを中心にして日々の保育を展開していた。保育プログラムのなかでは、地域に目を向け自然に触れ合いながら、子どもの遊びや探究心を引き延ばすことで、子どもたちが生命にも目をむけることができるように配慮されて保育が展開されていた。

本学においては、子どもに関する講義やプログラムは決して多くはない。しかし、既存の講義やボランティアなどを通して、子どもとの遊びに関わる機会を学生が持てるようにしていくことが必要である。そのためには、教員による子どもの遊びや特性についての指導はもちろん、子どもが自然に目を向けることができるような、支援者（学生）の関わりについての指導もしていく必要がある。また、子どもが地域の一員であることを意識し、長崎県や諫早市の伝統や文化を知る機会が持てるように、支援者（学生）が関われるような指導もしていく必要もある。

そのような取り組みをおこなうことで、これまでの児童分野での実習で学生が述べていた、「はじめて、子どもと触れ合った」、「最初は、どう遊んだらいいかわからなかった」、「子どもと信頼関係を構築するのは難しい」といったことは軽減されてくると思われる。また、児童分野の実習先から「学生が、子どもと関われない」、「信頼関係が構築できていない」、「一人一人に合わせた関わりをするように、心がけて欲しい」、「子どもの発達に応じた、レクリエーションを企画し、実施して欲しい」といった意見に対しても、学生自身で対応する力を身につけられるようになるのではないかと推測している。

本学、児童分野における課題は決して少なくはない。しかし、今回の視察で学んだことを学生の教育へと繋げていくことで、これらの課題を少しでも軽減できれば幸いである。

謝辞

視察させて頂きました、ドンウォン科学技術大学校幼児教育科ハ・ジョンヨン教授、公立チョンガ保育所のベイ・オンジン施設長、マリナ幼稚園のリ・ハジョン先生、保育園や幼稚園を案内してくださいました経商大学校社会福祉学科バク・ソチュン教授のおかげにより、生態幼児教育について学ぶ機会を頂けました。そして、韓国の先生方や保育園および幼稚園を紹介してくださいました、長崎ウエスレヤン大学のベイ・ヨンジュン教授のおかげにより、今回の視察を実現することができました。また、長崎ウエスレヤン大学の卒業生の浜崎様には、３日間におよぶ視察において通

訳をしていただきました。多くの方々のおかげにより、今回の視察ができましたことを深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

文献

林再澤（2008)「韓国の幼児教育史研究の現況と課題及び生態幼児教育学の位相(東アジアにおける幼児教育史研究の到達点とその課題)」『幼児教育史研究』(3), 50-58.
鄭晶姫「韓国幼児教育・保育の現状と発展の課題」
http://jsrec.or.jp/wp-content/uploads/2015/05/9af138004ffcea8a274b56019f1f54b4.pdf
（2016年7月16日アクセス）